- 8) 小熊：夢之心理，江原書店，1918. 9) 高峰：1938. 17) 西端：私の慢性副鼻腔炎研究の回顧と最近の感想，耳鼻臨床，1巻1号，2頁，1945.
 夢学，廣文堂書店，1924. 10) ウントの心理学（須藤訳）：内田老鶴圃，1924. 11) 小熊：夢，岩波哲学辞典，924頁，1925. 12) キリアム，ジエームス：心理学（今田訳）岩波書店，1927.
 13) 飯田：嗅覚の生理学，日本耳鼻全書4巻の1，12頁，1933. 14) 浅井：嗅覚の心理学，日本耳鼻全書4巻の2，52頁，1933. 15) ベルグソン：夢と哲学（廣瀬訳）東京堂，1936. 16) 吉益：夢の心理学—精神病学的研究，神経誌，29巻1頁，

摺筆に当り懇切なる御指導，御校閲を賜わりし恩師久保教授に深謝す。（本論文の要旨は日本耳鼻咽喉科学会東京地方会第292回例会に於て口述せり。

（原稿到着＝昭和26.11.21日—急載）

I. NAKAGAWA, M.D.: CLINICAL OBSERVATION OF MALIGNANT TUMORS OF THE ORAL CAVITY AND PHARYNX

口腔，咽頭に於ける悪性腫瘍の臨床的觀察（第1編）(1)

（癌研究会附属病院放射線科に於ける経験）

東京慈恵会医科大学耳鼻咽喉科教室（主任 佐藤重一教授）

癌研究会附属病院放射線科（部長 塚本憲甫博士）

講 師 中 川 一 郎
ナカ ガワ イチ ロウ

目 次

- 第1篇 緒 言
 第2篇 統計材料
 第3篇 口腔，咽頭悪性腫瘍の総括的統計
 第1章 各腫瘍の發生頻度
 第2章 各部位に於ける發生頻度
 第3章 各部位に於ける年齢及び性
 第4章 自覚症状発現より初診迄の期間
 第5章 自覚症状発現時並に初診時に於ける主訴
 第6章 初診時に於ける誤診
 第7章 各患部の臨床的誘因
 第8章 各臓器に於ける好発部位の關係
 第9章 初診時に於ける淋巴腺轉移頻度に就て
 第10章 病理組織学的統計
 第4篇 治療及び予後
 第5篇 結 論 主要文献

第1篇 緒 言

口腔及び咽頭は解剖學的殊に發生學上甚に複雑な關係が存するのみならず，機能的に見ても，常に食

物其他の物理的或は化學的刺戟にさらされる機會が多い爲か，多くの腫瘍が好發する部位にあたり，我我耳鼻咽喉科領域疾患を専攻する臨床醫家にとつては殊に重大な關心を持つべき局所である。

此領域に原發する腫瘍には，良性或は悪性の凡ゆる種類の腫瘍が考えられるが，之等のうち最も屢々發生するものは癌腫であつて，肉腫が之に次ぎ，良性腫瘍は之等に比較すると稀である。

私は癌研究会附属病院放射線科に於て，塚本憲甫部長の指導の下に耳鼻咽喉科領域の腫瘍の放射線治療を取扱う機會を與えられたのであるが，其間に得た之等領域の悪性腫瘍に關する經驗のうちから，特に口腔及び咽頭に於ける腫瘍に就て，綜合的な検討を加えてみたいと思う。幸にして私は塚本博士の御好意によつて，終戦後の癌研再開以來の過去3年間に亘る同放射線科の此領域の總ての患者の材料を使用する機會を得たので，之等患者に就て，種々の觀點から統計的觀察を試みる事が出来たのである。今茲に塚本部長に對して深甚の謝意を表する次第であ

る。

従つて今回以下に述べる観察は癌研究會附屬病院のような特殊病院に於けるものであり、然も放射線治療を對象として集まつたものであるから、之は一般病院に於ける統計とは、其趣を異にするきらいはあるが、材料の豊富な點に於て、聊かなりとも、諸先輩の統計的觀察に貢献し得るならば望外の幸であると考え、茲に報告する次第である。

第2篇 統計材料

茲に述べる症例は癌研究會附屬病院放射線科に於て昭和21年10月より昭和24年10月に至る3年間に耳鼻咽喉科領域の病變を主訴として集まつた患者の中、腫瘍のみの441名の材料を基として取扱つたのであるが、其中でも主として原発癌が口腔及び咽頭に限られた腫瘍の204例（大多數は悪性腫瘍）について、各觀點から検討を加えたものであり、此204名の患者は總て臨床的診斷のみならず、病理組織學的にも、其腫瘍の性質が確實に診斷せられたものである。尙私は之等の症例を説明するに當つて、先輩諸家の統計報告を引用して参考に供したのである。

第3篇 口腔及び咽頭の悪性腫瘍の總括的統計

第1章 各種腫瘍の發生頻度

口腔及び咽頭の組織は種々な組織學的組成を有し、胎生學的にも複雑な起源から成立つてゐる。然も齒牙の尖鋭な邊緣、義齒の不適當な補綴等が咀嚼運動に際して舌縁に與える機械的刺戟の外に食物、喫煙、飲酒等の物理的並に化學的の凡ゆる刺戟は廣義の外傷を生ぜしめるに充分な原因となり得るのであるが、之に加うるに口腔は細菌による感染の機會も少くない。従つて之等が誘因となつて、屢々慢性炎症性機轉、褥瘡性潰瘍、白斑、乳嘴腫様増殖等を生じ易い。之等の事實が直ちに悪性腫瘍の發生に好條件を與え得るか否かの論議は暫く措くとしても、口腔及び咽頭が悪性腫瘍の好發部位の一つである事は疑いを入れない事實であり、此領域に發生する悪性腫瘍の或物は、癌發生に關する Virchow 以來の刺戟説を裏書するかの如くに、特に刺戟を受けていたと思われる、其局所への發生が見受けられ、我々

に癌の刺戟説に好適な材料を示して呉れる場合が少くない。然も口腔に於ては他の腫瘍に比して癌腫の發現率が壓倒的に多く、良性腫瘍との中間に位すると看做される混合腫、内被細胞腫は極めて稀である。

之と少々趣を異にするのは咽頭であつて、此部に於ては良性、悪性の兩種瘍が共に發生し得るが悪性腫瘍の中でも肉腫の發生が癌よりも目立つて多い事であつて、混合腫或は内被細胞腫は1例も見られなかつたのであるが、之に反して鼻咽腔には纖維腫の發生が可成の頻度に見受けられた。

次に之等領域を通じて最も發現率の高い癌腫に就てみると我國に於ける口腔のみについての發現率は全癌の3~5%に當る。即ち長與氏の統計によると口腔癌は全癌腫の3.1%、又山川保城氏の統計では約5%となつてゐる。

然るにアメリカに於ける口腔癌に依る死亡數は實に全癌死亡者數の約35%であると云う。

次に肉腫に就て述べると其發現率は癌腫に比して遙に少く、山川氏の舊癌研に於ける統計では全悪性腫瘍の約1.1%に過ぎない。

然し乍ら耳鼻咽喉科領域に於ては其發現率は之に優り癌腫の約 $\frac{1}{5}$ 、安積、河村氏の統計では約 $\frac{1}{6}$ 、土井氏の統計では約 $\frac{1}{5}$ となつてゐる。

次に私の取扱つた症例204例について見ると癌腫167例（約82%）、肉腫27例（13.2%）、内被細胞腫の1例、鼻咽腔纖維腫の5例（約2.5%）となつており、之を口腔、咽頭に分けて見ると口腔に於ては癌腫が146例（98.6%）であつて、其大部分を占め肉腫と内被細胞腫とは各1例に過ぎない。

然るに咽頭に於ては各部位を通じて全症例56例中癌腫は21例（37.5%）であるのに肉腫は30例（53.6%）であつて癌腫より肉腫の方が却つて多く他の5例は纖維腫であつた。之は口腔に於て癌腫が壓倒的な多數を占めているに對して、好對照を示してゐると云う事ができよう。

第2章 各部位に於ける發生頻度

1) 發生頻度は第1表に示したように舌（94）、齒齦（26）、扁桃腺（26）、上咽頭（16）、頬（12）、口蓋（10）、下咽頭（7）、中咽頭（2）の順に成つてゐる。

2) 腫瘍の種類によつて之を分類すると、癌腫に

第 1 表

	発生部位	癌 腫			肉 腫			肉 被 細 胞 腫			纖 維 腫			
		症 例 数	男	女	症 例 数	男	女	症 例 数	男	女	症 例 数	男	女	
口 腔	舌	94	57	37										94
	齒 齦	26	17	9										26
	口 蓋	8	4	4	1	1	0	1	1	0				10
	頬	12	4	8										12
	口 唇	6	4	2										6
咽 頭	上 咽	4	1	3	12 (11)	9 (9)	3 (2)				5	3	2	21
	中 咽	2	1	1										2
	扁桃腺	9	9	0	17 (15)	11 (10)	6 (6)							26
	下 咽	6	1	5	1	1	0							7
計		167	98	69	31 (27)	22 (19)	9 (8)	1	1		5	3	2	204

但し()は細網肉腫

於ては舌が最も多く次で齒齦、頬、扁桃腺、口蓋、口唇、下咽頭、上咽頭、中咽頭の順になつており、肉腫に於ては扁桃腺、上咽頭、口蓋、下咽頭の順であり、良性腫瘍としては鼻咽腔纖維腫5例、肉腫1例である。

即ち口腔、咽頭を通じて舌癌の發現率が最も高く全悪性腫瘍の半数を占め、次で齒齦癌の26例、扁桃腺の肉腫17例、癌腫9例、計26例であり、口腔のみにつては舌癌断然多く次で齒齦癌、頬癌、口蓋腫瘍の順になつていて口唇癌が最も少く、肉腫は僅かに口蓋の1例のみである。

咽頭に於ては癌腫、肉腫を通じて扁桃腺に發生する事が最も多く、肉腫と癌腫の發生比率は略々2:1であるが上咽頭に於ては肉腫が断然多く、癌腫との比は3:1となつている。

之に反して下咽頭に於ては反對に癌腫が多く、肉腫との比は6:1である。

又咽頭全域の肉腫と癌腫との發現率を比較すると肉腫30例に對し癌腫は21例で其發現率は3:2となつている。

之を從來の文獻と比較してみると略々一致する所であつて、癌腫に於ては木村氏の病理學總論中の

“日本各地教室並に病院の臨床的診斷に基ずく癌發生臓器別頻度比較表”に依ると耳鼻咽喉科領域に於ては食道、上顎、喉頭、舌が上位に位置し、口腔が中位を占め鼻腔及び扁桃腺、口唇、頬等は下位に位している。

又宮原、腰野、安積、河村、土井、山川氏等の統計を見ても舌癌が壓倒的に多く、次で口蓋、扁桃腺の順で、之を口腔のみにつてみると舌癌次で口蓋癌、頬癌、齒齦癌で口唇癌が最下位に位し肉腫は主として口蓋に發生をみるものが多い。

咽頭に於ては本症例と同様癌腫、肉腫を通じ、扁桃腺が最も多く癌腫と肉腫との比は同数又は肉腫の方が優つている報告がある。

第3章 各部位に於ける年齢及び性(第2,3,4表)

其他肉被細胞腫 40才男(1例)

鼻咽腔纖維腫 平均19才(5例)

(男 3人……平均(18才))

(女 2人……平均(20才))

即ち

癌腫: 平均年齢55.3才 内 {男……58.0才
女……51.4才

40~70歳が男女共に最も多く(83.4%)を占めており、男に於ては50歳代、60歳代、40歳代の順であ

第 2 表

腫瘍の種類	舌 癌	歯 齦 癌	口蓋 (51.2才)			頰 癌	口 唇 癌	上咽頭 (47.3才)				中 咽 頭	扁桃腺 (50.7才)			下咽頭 (58.1才)	
			癌	肉 腫	内細胞 被腫			癌	肉 腫	肉 腫	纖維腫		癌	肉 腫	肉 腫	癌	肉 腫
平均年齢	54.7	54.4	56.2	22	40	60.2	49.1	45	48.2	36	18.8	57	61.6	46	32	59.8	48
男	57.1	56.7	57.7	22	40	65.7	57.7	47	50		18	71	61.6	41.8	32	69	48
女	51	50.1	54.7			57.5	32	44.5	40.5	36	20	43		52.8		58	
最低年齢	19	35	34			43	22	15	19		15	43	47	15		51	
(女)	(女)	(女)	(男)			(女)	(女)	(女)	(女)		(女)	(女)	(男)	(女)		(男)	
最高年齢	74	74	74			71	70	62	68		25	71	78	69		69	
(男)	(男)	(男)	(男)			(男)	(男)	(女)	(男)		(女)	(男)	(男)	(男)		(男)	

第 3 表 癌 腫

部 位 年 齡	舌		歯 齦		口 蓋		頰		口 唇		上 咽		中 咽		扁桃腺		下咽		男	女	計
性	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
0～10才																					
11～20		1									1								2	2	
21～30		1	1			1												1	2	3	
31～40	5	3		2														5	5	10	
41～50	12	13	2	3	2		3	1	1	1			1	1				19	21	40	
51～60	20	12	9	1		2	1	2			1				3		2	2	38	18	56
61～70	18	6	4	2	1		2	5		1					3		2		30	14	44
71～80	1	1	1	1	1	1	1		1				1		2				8	3	12
合 計	56	37	17	9	4	4	4	8	4	2	1	2	1	1	9	0	4	2	98	69	167

第 4 表 肉 腫

部 位 年 齡	舌		歯 齦		口 蓋		頰		口 唇		上 咽		中咽		扁桃腺		下咽		平 均		平均
性	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
0～10才																					
11～20才											(1)				(1)				2	2	
21～30才					1						(1)				(4)				6		6
31～40才											1				1	(1)			1	2	3
41～50才											(2)				(2)	(2)	1		5	2	7
51～60才											(5)				(4)	(1)			9	1	10
61～70才											(1)	(1)			(1)	(1)			2	2	4
71～80才					1						9	3			11	6	1		22	9	31

() は細網肉腫

り、女に於ては40歳代に一番多く、次で50歳代、60歳代の順であり、最低年齢は上咽頭癌の15歳の少女であり、最高は扁桃腺癌の78歳の男子である。

各発生部位についてみると平均年齢に於ては扁桃腺（61.6歳）、次で頬、下咽頭、口蓋、舌、齒齦、口唇の順で上咽頭の45歳が最も少い。

男女別については、各発生部位により多少の相違はあるが平均年齢に於ては男子より女子の方が10歳若く発生しているようである。又最低年齢は9部位の内6部位までが女子であり、最高年齢は9部位の内8部位までが男子である。従つて女子の方が男子より発生年齢が若いと云う事になる。

肉腫：平均年齢45.3才 内 {男子...44.1才
女子...48.2才

其内大部分が細網肉腫であるので、之と他の肉腫とに區別して観察してみると。

細網肉腫 平均年齢47才 {男子...45.6才
女子...49.7才

其他の肉腫 平均年齢34.5才 {男子...34才
女子...36才

即ち癌腫と同様40~70歳迄が最も多く全体の67.7%を占めているが、平均年齢に於ては癌腫より約10代位若く、又男に於ては50歳代が最も多く、次で40歳代、20歳代、60歳代、女に於ては10歳代、30歳代、60歳代共に同じ發現率を示しており、最低年齢は上咽頭肉腫の19歳の女子であり、最高は扁桃腺肉腫の69歳の男子である。

各発生部位によりて観察すると、平均年齢に於ては下咽頭の48歳が最高であつて、次で上咽頭、扁桃腺、口蓋の順で癌腫、肉腫を通じて口腔の方が咽頭より發現年齢が若くなつてゐる。

又男女別でみると肉腫は癌腫と反對に女の方が平均年齢が高くなつてゐる。

細網肉腫と他の肉腫と比較すると私の症例に於ては細網肉腫の方が遙に平均年齢が高いのであるが、其他の肉腫は僅か4例にすぎないので、之で統計を取る事は危険であるが、其内の3例までが40歳以下である。

從來肉腫に比較して若年者に多いというのが常識とされているが、本統計では必ずしもそうでなく、比較的高齢者に現われている。此傾向は細網肉腫に於て明かであるが、他の肉腫に於ては若年者に多い

事は從來の統計の示す通りである。

性別 204例中{男子...124 女子...80となつていて其比は略々3:2となつていて、其内癌腫に於ては男女の比は略々1.5:1であり、肉腫に於ては2:1である。更に鼻咽腔纖維腫の5例は症例は少ないが3:2となつてゐる。

次に男女の比率を其罹患部位によつて分けて見ると第5表の如くである。

第5表

		癌腫	肉腫	纖維腫	内被細胞腫
		男:女	男:女	男:女	男:女
口腔	舌	1.6:1			
	齒齦	2:1			
	口蓋	1:1	1:0		
	頬	1:2			
	口唇	2:1			
咽頭	上咽頭	1:3	3:1	3:2	1:0
	中咽頭	1:1			
	扁桃腺	9:0	2:1		
	下咽頭	1:5	1:0		

以上の男女別の統計を從來の文献と比較してみると第6表の如くである。

第6表

	報告者	河村, 安積	腰野	林, 劉	土井	山川	中川
		男	女	男	女	男	女
癌腫	男	3	1.3	5	3.5	3	1.5
	女	1	1	2	1	1	1
肉腫	男	1.5	1.2	2	2		2
	女	1	1	1	1		1

即ち腰野の統計を除いては大體3:1の比であるが、之に比べて本症例に於ては比較的女性に多いという事になる。又本邦では外國文献に比べて肉腫では女性に比較的多いと云われているが癌研の症例に於ても同様であつて、其比は2:1である。

次に發生年齢に關しては、癌腫に就ては長與氏の報告によると男60歳代、女50歳代であるが安積、河村、腰野、土井、山川氏等の統計によると男は50代、女40代となつていて本統計と大體一致してい

る。

之に反して肉腫に於ては土井氏は 30 歳代, 40 歳代, 50 歳代の順に多いとなつてゐるが林, 劉, 安積, 河村, 腰野等諸氏の報告では 40 歳代が最も多く, 之は本統計と同様であつて癌腫に比し略々 10 代若くなつてゐる。

次に鼻咽腔纖維腫は大部分が 25 歳以下の男性に發生すると云われており, 女性では比較的稀有とされているのであるが, 本統計では 5 例中 2 例に於て女性が見られる。

第 4 章 自覺症狀發現より初診迄の期間

1ヶ月以内	3ヶ月以内	半年以内	1年以内	2年以内	3年以内	4年以内	4年以上
22	50	41	54	22	8	3	3

即ち早期に外來を訪うものは比較的少く, 半年より 1 年以内に來院した者が最も多く, 次で 3 ヶ月以内の 50 例, 半年以内の 41 例の順で 3 ヶ月より 1 年以内に來院したものが約 71% で其過半数を占めてゐる。尙癌研來院以前に他所で治療を受け, 再發等に依つて初めて當院へ來院せるものが全體の約 33

% を占めてゐるのである。即ち從來の報告に比して比較的早期に受診せるものが少いのは, 他の外來を訪れて後我々の外來を訪れたものが多い爲めではなからうかと考えられる。

次に來院迄の期間と發生部位との關係を觀察してみると, 癌腫では口腔と咽頭とを比較すると, 咽頭の方が早期に受診せるものが多く, 其 71% が半年以内に來院してゐる。

之に反し口腔に於ては, 其約半数は半年以内に來院してゐるとはいへ, 他のは半年以上 1 年乃至 2 年と非常に遅れて來院せるものが少なく, 殊に 3 年以後に來院せるものもあり, 之等の大部分は口蓋, 頬, 口唇等口腔内に原發せるものである。

次に發病以來甚だしく長年月を経て受診せるものは口唇癌の 15 年前, 口蓋癌の 10 年前, 頬癌の 8 年前の 3 例を見るが, 之等は果して發見時既に其腫瘍が癌腫であつたか否かは判然しない。

肉腫に於ては其大部分が咽頭内に原發したものであつて癌腫同様, 比較的早期に來院しており, 約 65% が半年以内に他は全部 1 年以内に來院してゐる。

學 會

九州地方會第 239 回集會記事

久保隆一, 吉田汎志記

(昭和 25 年 3 月 12 日・久留米医科大学講堂)

幼児吃音症の音聲練習に依る治驗例

馬場 功 (久大)

文献上吃の本態に就きては諸論あるも, 音聲練習に依る一治驗を得たので報告。患者 4 歳男児。全身, 局所々見に著變を見ず, 遺傳的素因なく, 昨年 12 月川中に落ちて以來吃を生じた。毎日外來にて 1 時間風田氏法を参考にし深呼吸を 5 分, 單語の前に「ぬー」を付して發聲せしめ, 次に童謡, 會話語を適宜えらびゆつくり練習せしめ, 最後にテキストに依り普通會話の練習を行う事に依り 10 日で輕快 40 日で全治。吃の治療には患者に自信を持たせ, 患醫共に忍耐強く努めることが必要で之により良結果を

得られるものと思う。

追加 久保村雅夫。1) 吃患者の治療については相当困難なものがあり, 折角治つたと思つていても又再發する傾向がある。従つて一應治癒しても必ず環境の悪影響を受けないように注意が必要である。2) 又治癒の判定であるが, 発音は外見よく見えても満足せず Russbild をとつて, 之が正常に戻れば治癒と判定しても差支えなく再發も少いと思う。

上氣道疾患の聲域に及ぼす影響に就て

河野 雅久 (九大)

前回に引續き, 上氣道疾患就中鼻腔疾患 (鼻中隔